

諸井 薫

Kaoru Moroi

おとこぎ

俠氣に
ついて

角川文庫

おとこぎ
俠気について

もろい かおる
諸井 薫



角川文庫 7931

平成二年六月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)八一七—八四五一

営業部(〇三)八一七—八五二一

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

おとこぎ
俠気について

諸井 薫



角川文庫 793I

目次

骨盗人	五
その月暮らし	四
迷子	三
俠氣 あしき について	三
占いの極意	四
厄年	四
依存症	五
習慣	六
冬 ふゆ 隣 とどろ	四
手帳、暦、年賀状	六
実感 秘書論	九
男を見る目	一〇
小学唱歌	一〇
敬称略	二
男の財布	三

三	四	三	三	四	五	六	六	五	四	三	二	一
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

尊敬と尊重

落ち目

顔

メモリーズ・オブ・カー

広岡達朗に似た男

二足のわらじ

イジメの構造

側近あわれ

冠省タクシードライバー殿

「後ろ指産業」論

三浦だらけ

お見合いクラブ

型破り

手の平返し

あとがき

解説

一三三

一四三

一五一

一六〇

一六九

一七六

一八七

一九六

二〇五

二一四

二二三

二三八

二四四

二五九

二四四

二四七

安西水丸

骨盜人

焼香の列は思ったほど長くなかった。

(……それにしても薄情なもんだな、世間でヤツは)、男は腹が立ってきた。

故人は滅法面倒見のいい人間であつた。部下も出入りの者も見境がなかつたし、男でも女でも、ひとたび縁が出来るとベタベタに可愛^{かわい}がる方であつた。

四十代半ばで役員になつたくらいだから、たいへんな働き者だつたし、遣^やり手でもあつたのに、五十を前にして突然会社を辞めたのが、二年前であつた。

そういう会社の辞め方をする、当人にとって不名誉な噂^{うわさ}がどつと流れるのは世の常だが、故人の場合もそうだった。

表向きは任期満了で退任ということになつていたが、もつぱらの噂では、可愛がつていた部下が、競争関係にある会社と同じ、重要な社外秘情報を流していたことが発覚し、その先方の会社の常務が故人と大学の同級生だったということから、故人自身も行動の軽率を問われ、それで嫌気がさして辞めたというのだ。

そればかりではない。やれ、使途不明金が出てきたとか、会社の中に関係のある女が少なくとも三人はいたといったスキャンダルも、まことしやかに囁かれた。

故人と男は、学生時代一緒に演劇をやった間柄であつた。故人はサラリーマンになり、男はそのまま芝居の世界に入つたから、縁は薄くなつたが、それでも妙にウマの合うところがあつて、一年に一、二度は会つて飲んだ。

会社を辞めたという電話を貰つて、じゃあ飲もうということになつた夜、故人はさすがにこれまでと違つて元気がなかつた。

「で、どうするんだ、これから」

「うん、一年くらい準備にかけて、自分で商売を始めようと思つてゐるんだが、どうも一日気力が失せていくような感じなんだ。俺は違ふと思つてたんだが、やつぱり歯車人間なんだな。こうやつてポンと離れてみると、自分一人じゃなんとも勝手が違つて動きにくいんだ」

「そういうものかね、お前ほどの男でも」

話とぎれがちで、その夜の酒はどことなく荒く、出来上がるのが早かつた。

「……しかしな、俺達もそろそろ五十だ。寿命が延びたつていうけど、五十代でコロツといく人がこの頃やたらに多いだろ。でもな、そのくらいの年でいつちやうつていうのはさぞかし心残りだろうな。いろいろと片付けなきゃならんことが積み上がつてゐる年頃だし、

安心して目なんかつぶれないよ。

俺は思うんだけど、本当の友人ていうのは、そういうとき、死んだ人間にとっての一番の心残りを、しっかり引き受けてくれるってことじゃないのかな。

たとえば、家にも世間にも隠している女がいたとしてさ、急に倒れて入院なんかしたら見舞いに行くわけにもいかないだろうし、死んだら、葬式に来るのも憚^{はば}らなきゃならんだろう。そういうとき、本人がして欲しいと思うことを託せるのが、本当の友人でもんだと思うんだよ。

だからさ、お前がもしもコロツといくようなことがあったら、それは俺がちゃんと引き受けるから、事前にちゃんと教えとけよ。商売違いの俺みたいな人間の方が、何かについていいと思うしな。

一度こんなことがあったよ。会社に同期で入った男が厄年のとき死んでね。実はそいつが会社の若い子と出来てて、それが真面目^{まじめ}な分だけ深刻だったから、入院したとき、女の方も半病人になっちゃってね。どうやらカミさんは気づいてる様子だから、見舞いになんかに行ったら、ひと目で見破られちゃう。そこで、俺が自分の女だつてことにして連れてってやったんだ。お互いカミさんの前だから言葉はかわせなかったんだが、しっかり目であつてたよ。帰りがけにそいつが俺の手をしっかりと握って、涙ぐんでてね。

葬式のときも、俺が連れてつたんだが、その女の氣持を思うと哀れでね、俺は焼場でそ

いつの骨をひとかけらかつぱらつてきて、その女にやったんだ。ありやあしかし、なかなか難しい仕事だったな。何しろ人目があるからな」

男は、「いい話だな」と応じながら、この男は「もし自分に万一のことがあつたら、お前頼むぞ」と言外に言っているのだと思つた。

その男に女がいたかどうかは、この電話があるまで、男は知らなかった。

劇団の事務所へ、見知らぬ女から電話があつた。名前を聞いたが心当りが無い。どうせどこかの飲み屋の女だろうくらいに思つて出ると、その男の女であつた。

「……あの人が入院したんです。どうやら癌らしいのですが。それで、こういうときにはそちらへ電話をするようにと言われていたものですから。……私、病院へ行きたいんです。大変申し訳ないんですが、先生のところの研究生ということにでもしていただいて、お連れ願えないでしょうか」

言い淀みながらも、必死の思いでいる様子が、女の声に窺われた。

男がテレビにもよく顔を出していることが幸いした。その男の妻は、名の知れた俳優である男に氣をとられ、連れていった女の方にはほとんど注意が及ばない様子だった。

と、妻が男に言つた。

「ちよつとお願いできますか、事務室へ行く用がありますので」

男は、妻の後ろを追つて事務室に行き、妻に「本当のところ、容態はどうなんです？」

と訊ねた。事実心配でもあったが、少しでも長く二人にしておいてやる時間稼ぎの狙いの方が大きかった。

連れ立って病室へ戻るとき、男は部屋の前でわざと声を大きくして中に合図を送った。「それにしても、奥さん大変ですな。これまでが丈夫過ぎたから、こうやって奥さんに看病させるなんて初めてでしょう」

部屋に入ると、病人は目をつぶっていたし、女は洗面台で何やら片付け物をしている。「あらご免なさい、お客様にそんなことをさせて」

そう言つて洗面台に近づいた妻の顔が、ちよつと変わったのを、男は見逃さなかった。見ると、こちらを向いた女の目が赤かった。きつと二人になったとき、泣いていたのであろう。妻はその目を見たに違いなかった。

男は咄嗟に、わざとそのことを言つた。

「君、どうしたの？ 目が赤いね」

「……はあ、あの、コンタクトが合わないせいかな、なんですかとても痛いんです」

「そうか、この頃コンタクトを入れてる人で角膜炎にかかる人が多いっていうから氣をつけた方がいい。役者にとって目はとくに大切だから、大事にしなくちゃあ」

われながら、伊達に役者はやっていないかと、男は心中で苦笑しながら、そう言つてとりつくろつた。どうやら、妻も合点がいったという顔をしているのを見てほつとして病人

の方に目をやると、薄目をあけて男の方を向き、軽くウインクした。

訃報ふほうを聞いたのは、見舞いに行つてから、わずか二か月後であつた。病気の進行が早かつたのであろう。やつれる暇もないくらい、あつけない死であつた。

男は女に早速に電話をした。

「……やつぱり」、覚悟はしていたらしいが、その後は絶句して、忍び泣く声がしばらく続いた。

「今夜、僕は通夜に行くが、あなたはやめた方がいい。明日が告別式だそうだから、そのとき、僕がお連れしますから」

男は、慰める言葉も浮かばぬまま、とにかく、明日その後にでもゆつくり話すことにして、女と落ち合う時間を約束した。

男は頼まれた弔辞をどう書こうかと思ひあぐんだが、型通りはやめることにした。

——君はいつだったか、僕にこう言つたじゃないか。「もしもコロツと逝いつたら、お前が心中ひそかに抱えている心残りはすべて俺が引き受けてちゃんとやる。たとえはお前に女がいたら、そっちの方もお前のぞむであらうようにしてやるから、安心して死ねよ」とそう言つてくれたじゃないか。

それなのに君は、僕に断りもなしに勝手に死んでしまった。

君は僕と違つて、不品行じゃなかったから、そういうことで僕にして欲しかったことなんかなかったかも知れない。しかし、男が五十前で死ぬということが、無念でないわけがない。

僕はいま、君の無念がなんであつたか。君の中で消え残っている心残りとはなんだつたのかを、とても知りたい。

君が言つた「本当の友人というのは、そういうとき、もう伝えることの出来ない死者の思いを、正確に理解し叶^{かな}えてやる存在なんだ」という言葉を、僕は自分に課すつもりだ。

君はあらゆる人間に優し過ぎる人だつた。僕には君のようにする自信はないが、君が僕にしてやると言つてくれた十分の一でもやれたらと思う。きつと君のことだ。もどかしがつて「違ふんだなあ」と、夢枕^{ゆめまくら}にでも立つて言いそうな気がしなくもないが、そうなればそれでまた君と話が出来るんじゃないか。

とにかく、安心して静かに眠つてくれ。

男が弔辞を読み終わつて参会者の席に目をやると、あの女が、たまらずハンカチで顔を蔽^{おほ}っているのが見えた。

焼香の列に、男は女を従えてついた。

遺影の前で、並んで香を手向けている女の頬^ほから、また新しい涙がこぼれ落ちるのを、

男は見た。女は、今日は薄い色の入った眼鏡をかけている。少しでも妻に悟られまいという氣持の現れなのだろうか。

男と女が妻に弔意を述べると、妻の伏せられていたやつれた顔が上向き、男を見、そして女に目を移した。そのとき、妻の目に泛んだ訝りの色に、男はもはやとりつくろふ隙のないのを悟った。

出棺を見送るとき、男はそつと女に「今夜よかつたら食事を」と誘った。自分は最初から火葬に立ち合つてくれるよう頼まれているが、まさか女を火葬場へ連れていくわけにもいかず、ついそういう約束をしてしまったのである。

火葬場での待合室では、もう悲しみの色は誰の面上にもなく、声をあげて笑いながら世間話をしている人さえいた。

男は思った。

（人の死に対する悲しみは、知人は告別式の帰途に消え、友人は三日にして忘れ、近親といえども、子供は四十九日の法要を境に、妻は一周忌を終わるところまでしか残らないのではないだろうか。そう考えると、人間なんてつまらんものだ）

男が慥然として冷えた渋茶をすすっていると、係の人間が火葬が済んだことを告げに來た。

柄の大きな男だったが、意外にも骨は細かった。男がわざと骨拾いの人だからの一番後

ろについたのは、（出来るものなら、骨をひとかけらでもそつと貰おう）と思ったからであつた。

「頼むぞ、うまくやってくれよ」

あいつがそう言っているような気がしてならなかった。最後の二人の一人として男は箸をとった。相手の人は七十ほどの年寄りの女で、あまり目がよくなさそうなのが幸いだつた。男は二人で一緒に骨をはさんで運ぶとき、わざと不器用そうに箸をとり落とし、それを拾うふりをして、骨を指でさぐつた。手に当たつたのは小骨の先ほどの小さなものであつた。

——男はその骨を受け取つた女の中で、果たして死者への悲しみはどのくらい保つだらうかと思つた。

その月暮らし

妻が溜息^{なめいき}まじりに言った。

「……なぜあるとき、借金をしてでも買っておかなかったのかしらね。坪六十万だったから二千四百万でしょ。なんとかなったはずよね。そのローンだってもうそろそろ終わってる頃だわ。いまいくらだと思う？ 百八十万ですって。七千二百万よ。それをこうやっていまだに地代を払ってるんだから、本当にバカバカしいわ。その地代だって二十年で十倍に上がってるし、借地なんていざ処分しようと思っても名義書換料やなにかで、地価の半分以下になっちゃうっていうじゃない。

……とにかく、あなたっていう人は、家に対して不熱心過ぎるんだわ。あの頃はそんなゆとりはなかったっていうけど、ゆとりがないのはどこの家だって同じはずだわ。このご近所だって、うちとそれほど変わらない収入なのに、ちゃんと自分のものになっているお家があるじゃない。だから、要するにやる気がないのよ」

男は「そんなこと言ったって……」と、その頃のことを言いたかったが、事実、人はそうしているのに、我が家だけはそれをいまだに果たしていないのである。つまり後れを取

ったことだけは歴然としているのだ。とすれば、何を言っても敗者の自己弁護になる。

「ま、そう言われればその通り。俺はたしかにそういう点ダメだな」

妻の侮辱的言辞に怒ってみせるテもあるとは思いつながら、男は意気地なく白旗を掲げるようなことを言ったのは、本当にダメかどうかは別にしても、たしかに堅実とは言い難い特徴を、自分の人生態度に認めざるを得ないからであつた。

たとえば、妻の言うこの家のことだ。

海外へ転勤になつた友人が、住んでまだ二年とたつていない家を処分するという話にとびついて、長期分割で譲つて貰つたものだった。借地ではあつたが四十坪あつた。家は総二階で延^{のべ}で四十坪だから、子供がまだ小さい四人家族には、当時としては過ぎた住まいだった。

住んで五年ほどたつた頃だった。地主から相続の関係もあつて、土地を買わないかという話があつた。相続税を払う予定が迫つていたせいか、かなり安い値であつた。

妻はもちろん乗り気であつたが、男は渋い顔をした。前の持主である友人に、月々支払う金額が月収の三分の一弱であるところに、たとえ銀行ローンとして、その返済が上のせになるという経済状況が想像がつかなかったこともたしかにあつた。だが、それよりも、その頃男は、いまの勤めをやめて、友人達と独立して会社をつくらうという思いが強くなるにいたつた。